

**【学校教育目標】** 豊かな心と知性にあふれる、心身ともにたくましく生きる児童の育成

**【学校経営の重点】** 学校教育目標の達成に向けて、教職員が一体となり、子どもが「自分を、学校を、地域を誇りに思う」活力ある学校づくりに向け、「考える子ども」(知)「やさしい子ども」(徳)「すこやかな子ども」(体)のバランスのとれた児童の育成をめざす。

1. 基礎基本の定着と思考力の育成
2. 学校教育活動全体を通じた豊かな心(友愛の心)の育成
3. 運動に親しむ意識と健やかな体の育成

**【児童の実態】** ○国語科の研究1年目の昨年度は、課題の投げかけ方を吟味することで、子どもたちは授業中の課題を自分事として捉えることができるようになった。○自分の考えを論理的に説明し、子ども同士で練り合いながら理解を深めていける力をつける必要がある。○読解力が不足しているため、内容の把握ができない児童がいる。○個人差は大きい。学年や教科によっては、下位層が多い。○家庭学習の習慣が定着していない児童もいる。○通常学級で、特別な配慮が必要な児童がいる。

取組の評価内容		1学期自己評価	2学期の取組
1. 個に応じた指導の工夫	○単元末テストの年間平均点を、全学年 85 点以上、かつ 60 点以下を 5%未満にする	国・社・理で達成(算 84.0) 60 点以下 4 学年で未達成教科有り	算数では少人数・習熟度別の学習形態の見直しをする。課題やテストの青○100 点の徹底。互見授業での授業力向上。
	○各種学力調査(5・6年)及び標準学力調査(3・4年)全国・大分県全項目平均以上	5年生(国・算・理) 国・算(活用)以外県平均以上達成 6年生(国・算) 全教科平均以上達成	問題文の理解と語彙力の向上、書くこと、説明することに最後まで取り組む力をはぐくむ授業(表現することにこだわる授業)実践を行う。
	○算数科では、4年生以上での習熟度別コース授業の計画的な実施	4年生以上で少人数・習熟度別学習を実施	個の実態を把握し、単元ごとに学習内容に応じた指導形態を工夫することで、「できる」喜びを味わわせる授業を行う。
	○テストや家庭学習の間違いのやり直し(青○100 点の取組)	教員回答 100%	全校統一した青○100 点の取組を継続する。やり直しや説明の時間を確保する。
	○「南小タイム」の計画的な実施、全学年共通した国語・算数問題集	教員回答 96.6%	国語は「αドリル」で読解力、算数は、「スイッチ・オン」で基本問題と活用問題に取り組む。
2. 教員の授業力の向上	○「学校の勉強がよく分かる」児童 90%以上	児童回答 89.7%で目標は未達成	習熟度別の指導や ICT の有効活用などの工夫により「分かる授業」を目指した授業力の向上と、低学力児童への個別指導に取り組む。単元末テストで定着状況を把握する。
	○可視化ツールを用いた授業を展開し、「考えが書ける」児童 85%以上	「可視化ツールの活用」教員回答 91.4%「考えが書ける」児童回答 88.6%で目標達成	ソフトやアプリなども含めた様々な可視化ツールを知り、積極的に授業で活用していく。
	○新大分スタンダードを基本にした「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」(書く活動を 2 回取り入れる)を位置付けた 1 時間完結型の授業展開	授業者全員が同じプレートを活用、書く活動を 2 回取り入れる	学力向上研修で新大分スタンダードを基本とした授業や板書・ノート指導を行い、授業力を高める。書くことへの意欲をもたせるために、ノートの授業ごとの評価を行い、苦手な児童には文例を提示するなどの具体的な支援を行う。
	○校内研修への主体的な取組と授業公開	授業公開を年に 1 回は行う(2・3 学期)	学年部 5 分間研修、国語科タイムの導入で指導の共有を図る。互見授業を積極的に参観することにより、自身の授業技術を高めていく。
3. 小中一貫教育の推進	○新版「家庭学習のすすめ」の定着(学年×10分+10分) 85%以上	児童 84.3% 保護者 91.8% 教員 86.7%	学力向上プロジェクトで指導の徹底をする。学級懇談や学年通信で家庭への啓発を行う。
	○学校図書館活用 読書の質の向上 「本を読むことが好き」児童 95%以上	児童回答 89.0%で目標は未達成	読み聞かせや自分読みの工夫で読書タイムを充実させる。様々な本を読むことでの読解力・語彙力の向上。
	○豊府小や南大分中との連携、情報交換による共通な取組の実施	8月までに 2 度、南大分中で情報交換実施	児童の実態や単元末テストの結果、来年度に向けた教材の選択についての情報交換を行う。